

「そこに行く」ことの価値 リアル空間のエンターテインメント価値を 旅・ホテルから解く



株式会社デザインセンター
プリンシパル クリエイティブディレクター

林野友紀

時代への共感と普遍性、双方から紐解くラグジュアリーの再定義をテーマに、素材・アート・工芸などを通じてその土地・場所の文化や歴史に敬意を表し、内面的な充足を得られるような空間づくりを追求します。

destinations となりうるホテル

今日、旅がエンターテインメントであることは論をまたないだろう。旅は「観光」という言葉に置き換えられ、巨大な美術館や遺跡を観光資源化した西欧の例をもち出すまでもなく、いまや国家規模で取り組む一大産業となってきた。

さて、その旅（ここでは「観光」ではなく、あえて広い意味をもたせて「旅」と呼びたい）の内容を分類してみると、人によってその目的はさまざまだ。いわゆる観光スポットの見物、地域の「食」、風景や自然、音楽や演劇など狭義のエンターテインメント。普段と違う場所で何もしない時間を過ごすことが目的の人もあるかもしれない。

私の場合、旅の目的はホテルだ。社会人になってホテルを含むホスピタリティ空間のデザインを仕事にしたことがきっかけだ。いまでは職業上のリサーチを兼ねて、特定のホテルに泊まるために旅の行き先を決めることのほうが多くなっている。

ホテルのロビーは、その街の現在の生きた表情を知る絶好のパブリック空間だ。都市のなかでも活気あるクリエイティブな気運が高まっているエリアには、拠り所となるホテルがあり、バーやレストランにはその都市のアートやデザインを動かしているクリエイターが集っている。旅立つ前にホテルリサーチをして

いる段階で、ガイドブックにはない面白いようなエリアを発見することも多い。近年ではSNSなどの情報から気になるホテルを調べ、行きついた先が最新の街の社交場であったということも多い。

ホテルもただ星が多く高級で快適であればよいというわけではなく、その都市ならではの魅力やオリジナリティにあふれた宿との出会いは、非常に心が躍る体験となり、いつまでも記憶に残る。

日本にもここ数年の間に、個性豊かな滞在を切り口にしたホテルが急増してきた。かつては何千キロも離れた北欧やアラスカまで行かなければ体験できなかったアイスホテルやツリーハウス型のホテルも、現在では国内でも体験できる。24時間読書ができるブックホテルや現代アートのギャラリーの中に滞在するホテルもある。海、湖、山などの自然を活かした立地条件により、付帯施設のテーマ性（海水浴、スキー、ゴルフ等）を高めたリゾートホテルは、日本にホテルという業態が輸入された当初から存在した。アグリツーリズム・グリーンツーリズムなどと、さまざまな切り口とのかけ合わせで、ホテルという枠にとらわれない宿泊体験の領域はまさに、滞在型エンターテインメント・コンテンツの宝庫である。それぞれ個性的な、個の体験の特化という点では、こういったコンテンツ型ホテルも非常に面白いが、リゾートホテルの付帯施設テーマの変形であるとも考えられる。

ここでは、周辺環境に依存するリゾートもしくはコンテンツ型ホテル以外で、ホテル自体の面白みが destinations となりうる事例を紹介してみようと思う。

別用途だった建物のホテル化

職業的に多くのホテルをリサーチしているが、どれだけ事前情報を集めても、実際に足を運ばないとわからないのもホテルである。ホテルの満足度には、空間、インテリアはもとより、サービスと価格、体験の希少性などが複雑に絡みあうので、一概に高いホテルに泊まれば満足度が高いというわけでもなく、オリジナルの軸、世界感をもっている、よい意味で期待を裏切ってくれるホテルに魅力を感じる。

なかでも、リノベーション等で意外な用途だった建物をホテル化している事例は、はじめからホテルとしての高い設えやサービスを期待していないぶん、意外性にあふれた体験が面白いものが多い。

ケース① The NED LONDON

歴史的建造物である銀行をホテルにリノベーション～

The NED LONDONは、1924年にサー・エドウィン・ネッド・ラッチェンスが設計した旧ミッドランド銀行の建物を、ホテル等にリノベーションして2017年に開業した。かつて銀行のホール部分だった1階は天井の高い大空間となっ

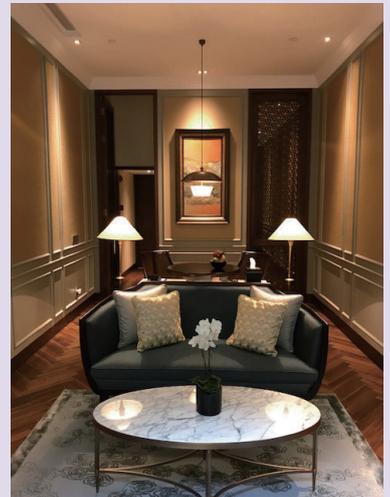
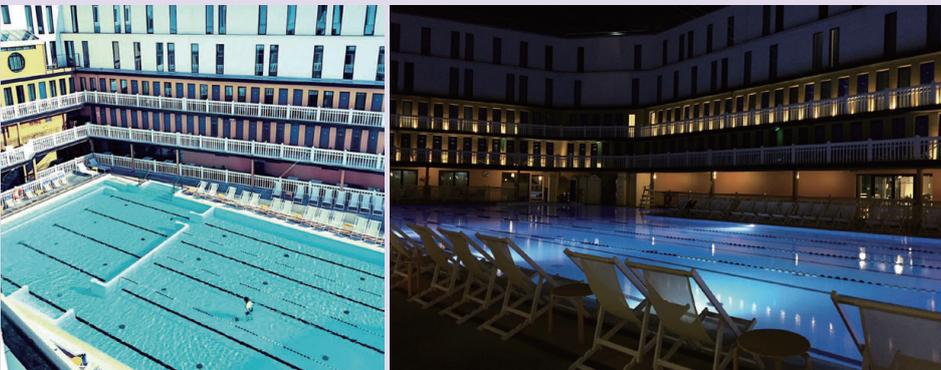
The NED LONDON



Capella Shanghai Jian Ye Li



Hotel Molitor Paris



ており、中央部のステージを囲むように10のレストラン&バーが展開している。ステージでは開業以来、さまざまなアーティストが演奏を行ってきた。客室を含むインテリアは、モダンデザインではなく、あえて竣工当時の1930年代を思わせるクラシックな趣で、まさに現代の社交場としての様相を呈している。

歴史ある由緒正しいホテルとは別軸だが、一步足を踏み入れたときの異次元感は、歴史的建造物の利用として、これほどのマッチングはないだろうと思わせる事例だ。

ケース② Hotel Molitor Paris

元市民プールを活用したホテル

都内で屋外プールの計画に携わっていたときに、業界で話題になっていたこ

のホテルを視察に訪れた。パリ16区ブローニュの森に近い閑静なエリアに、閉鎖後20年以上放置されていた市民プールがあった。2014年、年間を通して利用可能な温水プールとして再生。さらに、プールを囲う旧ロッカールームの建物の上に客室をめぐらせて巨大なクルーズ船のような仕立てでゲストを楽しませるホテルが完成する。設立当初1930年代のアールデコ風の客室からプールが見下ろせ、廃墟となっていた市民プールがラグジュアリーなホテル空間へと転用された。

ケース③ Capella Shanghai Jian Ye Li

部屋に驚きがある、住宅遺産の魅力をホテルとして再生

「石庫門」は、1930年代の上海のランドマークであった中洋折衷型の伝統

的建築様式だ。この住宅遺産の魅力をホテルとして再生したのがCapella Shanghai Jian Ye Liである。

カペラ・ホテル&リゾートは、東南アジアを中心に2009年に誕生した比較的新しいリゾートホテルグループで、Capella Shanghai Jian Ye Liは2017年にオープンした。筆者は翌年に、知人の勧めで予備知識なく訪れたが、その3階建ての客室は、これまで訪れたホテルのなかでも忘れられない部屋のひとつにあげられるほど「驚き」にあふれるものだった。かつて複数の家族が入居していたであろう長屋の住宅を縦に貫いて、3階建てのヴィラ様式の客室としている。室内はスキップフロアになっていて、1階リビング、2階寝室、それぞれの中間階がエンターテインメントルーム、バスルームとなっている、屋上

SOF植光花園酒店



SHIROYAMA HOTEL kagoshima



ザセラールN パロン・ナガサワ:若い世代にもホテルに親しんでもらうため、気軽に1杯、ひとりでも入りやすいカウンターをメインとしたワインバー
撮影:榎ナカサアンドパートナーズ



インペリアルスイート:鹿児島や九州の伝統工芸を取り入れた客室
撮影:榎ナカサアンドパートナーズ

写真提供:城山観光株式会社

ルーフトップテラスへ続く。

ケース④ SOF植光花園酒店

廃墟感を残したまま、絶妙なバランス感覚でリノベーションされたホテル

台中のSOF植光花園酒店は、決して高級ホテルではなく、むしろリーズナブルな部類に入る。しかし、このホテルもいい意味で期待を裏切る経験を提供してくれた。台中国家歌劇院でオペラを観るといった目的のため、寝泊まりだけのつもりで台中駅に近いエリアに宿をとったが、猥雑な駅裏の雰囲気そのままの「廃墟」をそのままホテルにリノベーションしたのがSOFだった。

外観のタイルの塗装は大半が剥がれ、苔やサビや汚れが付着したままだ。唯一、ホテル名を示す切り文字が壁になかったら、完全に廃墟として通り過ぎてしまうだろう。ホテル内部も、以前の内装を撤去し、コンクリートの柱梁が表面をハツられたままむき出しになっている。その廃墟感を残したまま、水まわりや一

部の壁・床など、最小限のリニューアル部分が挿入されている。コスト、デザイン、コンセプトのバランス感覚が絶妙で唸らされた。

ソフトとしての空間の魅力づけ

思えばこの業界に入ったのも旅がきっかけだった。学生時代は建築を学んでおり、エジプトのピラミッドにはじまり、フランク・ロイド・ライトの落水荘、ル・コルビジェのサヴォア邸など、教科書に載っているような名作建築から当時の最新事例まで、多くの都市をめぐる建築を訪ねる旅をしていた。そのさまざまな旅の途中で、その地域で繰り広げられている異なる日常を送る現地の人々の風習や文化的側面の方に関心をもつようになった。

特にヨーロッパでは、何百年と歴史ある石造りの建築物を保存するだけでなく、また美術館や博物館といった公共の用途だけでもなく、日常の暮らしの

シーンとして利用している姿に惹かれ、建築そのものを新しくつくることよりも、その中身のサービス、ソフトとしての場の魅力づけ、付加価値の提供・更新性のようなどころに興味が移っていった。

丹青社による実例

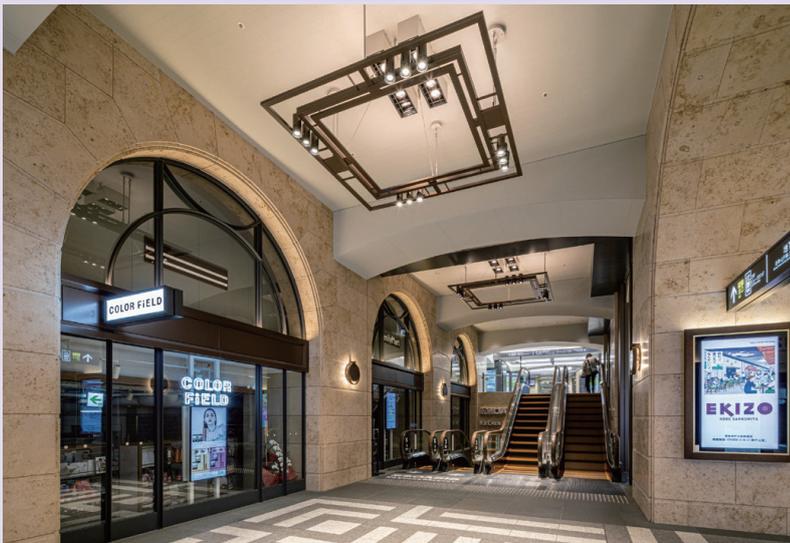
ケース① SHIROYAMA HOTEL kagoshima

地域らしさを活かした文化継承の場

いま、内装インテリア業界でホスピタリティデザインを専門としている者としては、コンテンツと一体化したホテルの開発も非常に面白いが、いわゆる歴史あるホテルの存在価値・文化的意義を、正しく現代のライフスタイルに調和させながら継承してゆく役割にも責務を感じる。地域の拠り所として、家族のハレの日の節目を見守るようなシティホテルの役割、エンターテインメント性も文化のひとつとして、継承してゆきたいと考える。

筆者がかかわったシティホテルの事例として、SHIROYAMA HOTEL

神戸三宮阪急ビル



東館1階コンコース

撮影: 橋伸和 木原慎二



写真提供: 阪急電鉄株

kagoshima を紹介したい。鹿児島市の高台に位置し、市内と錦江湾、桜島の絶景を望むこのホテルは、地域を代表するホテルとして皇室をお迎えするなど、鹿児島の迎賓館としての役割も担っている場所だ。全355室31タイプの客室を備え、敷地面積は8万3,000㎡と桁外れで、はじめて訪れた人は館内で迷子になるほどの規模だ。

「幸せな時を重ねる場所」をコンセプトに掲げているだけあって、本当に多くのゲストに愛されており、ホテルとゲストの関係性が素晴らしい。親子何代にもわたって家族の節目をここで迎えているというゲストの光景を度々目にする。

そういった歴史あるホテルのリニューアルを担当するにあたり、地域に根付いた伝統あるホテルをいかに時代にあわせつつブランディングしていくかということが課題であった。外資系ホテル参入の計画もあり、コンセプトは「新しさ」「モダン」といったものではなく、「城山らしさ 鹿児島らしさ 日本らしさ」として、感性・上質・伝統をテーマとした。いつ来ても「城山らしいな」と感じていただけるような、唯一無二の価値を提供することに注力した。

SHIROYAMA HOTEL kagoshima の事例を通して、訪れた人の背筋がピン

と伸びて、その街に誇りをもてるような文化継承の場をつくり出すことが、大きな役割だと痛感した。

丹青社による実例 ケース② 神戸三宮阪急ビル

新旧要素が入り混じる、 地域住民の誇りになるような空間

2021年に取り組んだ神戸三宮阪急ビルも、そのような大きな理念に基づいてデザインを行なった事例のひとつだ。

都市の印象を決定づけるものとして、最初の印象はとても重要だと考える。たとえば、イタリアの水上都市ヴェネツィアの場合を考えると、夜の陸路で入ると、昼の海路で入るとではまったく印象が異なる。はじめてその都市を訪れた際の天気や時間帯は、その後も長く都市のイメージとしてつきまとう。

そういった意味で、街の玄関口である駅施設を設計するというのは、街の印象を左右しかねない大きな責任を負ったプロジェクトであった。

1936年竣工の旧神戸阪急ビル東館は、阪神淡路大震災で被災後、「暫定ビル」として営業を続けてきた。神戸・三宮のシンボルとして市民の拠り所であったかつてのビルの姿を「再築」という形で低層部に一部再現し、高層部および

西館・高架下も含めた神戸の新たな玄関口、シンボルとして再生するプロジェクトであった。

駅的环境デザインのコンセプトとして、震災で消失した街の記憶をさぐり、駅の中に街の個性を投影しようと試みた。神戸の街の個性を「社交場」ととらえ、街の人の誇りになるような「駅」をめざした。

クラシックとモダン、エレガントと雑多な横丁感。ただ、かつての姿を再現するのではなく、竣工当時、時代の最先端であったデザインの思想やエッセンスを参照し、現代の解釈で再構築。なかでも一番シンボリックな東館メインコンコースは、アーチが特徴的だった旧ビルの外観要素を取り込み、阪急・神戸らしい華やかさを表現。優美な曲線のディティールとモダンなパターンの床を対比させ、新旧要素が入り混じった高揚感のある駅空間とした。

2020年以降コロナ禍で移動が制限されたが、むしろ旅に対する根源的な欲求を再認識する結果になったのではないかと。そして良質なホテル体験は、旅自体の一つの目的になり得る。VRやメタバースといったデジタル体験が現実を凌駕しつつある昨今だが、それでも、実際にその空間に足を運ぶことでしか得られない体験を、これからも提供していきたいと思う。